

ひと昔前は怖い物の代名詞といえば「地震・雷・火事・親父」と言われていました。この頃は携帯電話などで雷の情報も事前に知ることが出来ますが、被害は発生しています。火事は消防士の日頃の訓練や消火活動により素早く対応出来るようになりましたが、火事でお亡くなりになる方も少なくありません。父親の存在は、家庭によっては怖い存在というよりも、穏やかな父親像が求められているようです。そして地震に関していえば、先の震災は記憶に新しく、また、日本各地には様々な地震の影響が有ります。災害は何時の時代でも怖いものです。

さて、本格的に夏から秋へと移り変わるこの九月は、よく雷が鳴ります。突然のゲリラ豪雨。にわかに厚い雲に覆われ、日が陰ったと思ったら、ゴロゴロと音が鳴り、稲光がピカピカと光ります。単なる気象現象と言ってしまうえばそれまでですが、雷が嫌いだという方も多いでしょう。

雷様といえば、昔から、昼寝をしていた子供がおへそを出していたら、雷様におへそを取られちゃうよ、と脅かされたりしました。雷は、生活に密着した気象現象であったため、急に気温が下がり、お腹を出して昼寝をしていたら体を冷やしてしまう、雷が近づいたら大きな木に近づかずに建物の中に避難しましょう、など、注意喚起の意味で言葉が残されているのかもしれませんが。

「稲妻に近くて眠り安からず」

夏目漱石の俳句で、雷に驚かされゆっくり眠れない情景をあらわしています。歳時記を読みますと、稲妻は秋の季語です。秋の夜の稲光で音は聞こえず光だけひらめく時もある。その光

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

が稲を実らせるという信仰があり、親しみを込めて稲の妻と呼んだ、そこから稲妻と呼ぶようになったそうです。

福井県にある大本山永平寺を開かれた道元禅師は、その著書『ふかんざぜんぎ普勸坐禅儀』という坐禅の教えを示された書物の中で、

「人の身体は草に宿った露つゆのようにはかない・・・はかないものであり、人の一生は電光つまり稲妻のように一瞬のものである・・・。」 と稲妻を電光、電気の光という言葉を使ってお示しになり、仏道修行に精進する大切さを説かれています。

九月一日は防災の日です。先人の教えを胸に刻みつつ、いつどこで起こるか分からない災害にも出来るだけ対応出来るよう、普段の行いを見つめ直してみる機会としたいものです。

— 終 —